





番外編

2010-2014

2010年、アメリカ西海岸タコマにある、ガラス美術館 (Tacoma Museum of Glass) 向けに作られたシエツポ。なか?シエツポの歴史的には番外編に位置づけておきたい少し異質なタコマシエツポ。色はレッド、ブルー、ピンク、グリーンなどのファンシー寄り。バリエーションは定かではないが、その後1,2年デモンストレーションで作られた可能性あり。2014年にも生産されている。裏のサインもその時々で、自由に手描きされているようだ。

SIGNED / IITTALA etc.

唯一無二、ど真ん中バード。

切手収集を趣味習慣にしているのなら月に雁、映画好きならばつついっローマの休日、ラーメン好きならラーメン二郎といった所だろうか。アニメ好きのガンダム、漫画好きの藤子不二雄、どんなレベルの岡村靖幸ファンであっても、カラオケでとりあえずのだいすき、メのカルアミルクである。ど真ん中には、何にも替え難い特別な魅力がある。さて、オイバトイッカのど真ん中バードはどの鳥か?と聞えば、10人が10人、其れだと答えるだろう唯一無二つぶりを見せるのが、フィンランド語でシエツポ、英語でフライキャッチャーと名付けられた、素朴な小さな鳥だ。過去に立ち寄った日本のビンテージショップでは、脚の無いのがシエツポ、脚があるのはフライキャッチャーだと教わったけれど、それはどうやら間違っていたようだ。ただ、そんな誤情報が出るのめ人が興味を示している証であり、バード収集人からのシエツポ支持率たるや、花嫁修業女子の得意料理 肉ジャガ率を凌ぎ、中年男性の斜め掛けバック着用率にも切迫する。これ程までに圧倒的な人気作、ど真ん中を持つコレクションというも珍しい。結局、シエツポはバードの原点に在るのだけれど、他とは全く違うのだ。独特な色ガラスの合わせ、生産工程を踏まえた上での造形、そこから生まれる少しすっとばけたデザイン、それらオイバ作品の魅力の種を全て持ち合わせる上に、1,000種類にも及ぶオイバトイッカバード系譜の頂点に君臨する始祖鳥なのだから、バードの世界に脚を踏み入れたなら、我が物にしたいと思って当然、それこそミュンヘンに行ったのならビールを飲むというなもの。そして、小さくサッパリした物だから、二つ三つと欲しくなるのは、もはや自然の摂理。そうしたくなる、いや可能にする豊富なバリエーションがシエツポにはあるのだから仕方がない。それを手にしたいと思うのは当然で、間違いないと長井秀和も言うぐらいに間違いない。

だから、スコープがシエツポを復刻したいと思う事もまた自然の摂理で間違いない。だが、本音をいうと、このプロジェクトはとんでもない規模になってしまった。オリジナルと同じ仕上げに近付ける程、目まぐるしく価格は高くなる。当時の標準が現在の標準ではないからだ。でも、価格はコレという理想もあるから、そこを含め交渉すれば、必要な生産数の桁がポッコーンと跳ね上がる。そうさ、何もかも思うようになるわけない。仕方がないので全ての理想を貫き通し、膨大な数をオーダーする事にした。数年前になるが、相当無理してパラティッシオーバルプレート25cmブラックを復刻し1万枚の在庫を抱えた時と心持がどこか似ている。積み上げられた箱の山を目の前にして、流石の僕も少々肝を冷やした。その頃からスコープも成長はしているものの、対象が食器からアートピースへとスケールアップしている。単独で背負うには大変な重さではあるのだけれど、原点には無理をしてでも手を出す意味と価値がある。此れと閃けば、いざとチャレンジだ。時が経過し、時折作られるシエツポもオリジナルから遠い物になってきているから、そろそろ元の姿に正しく巻き戻し、作る側も手にする側も、誰もがその原点を知り、手に出来るという事になりたい。このシエツポこそ、パラティッシオーバルプレート25cmブラック、カステヘルミプレート10cmに続く、スコープ三度目の真なる復刻、若干コラボりましての新品含む、である。当初の予想を凌ぐ大スベクタクルとなってしまったので、見るには面白く、手にするにはこの上無く良い機会である事は間違いない。

小さなバードってのが無いんだなあ、これが

オイバトイッカのバードを別注するならば良い物を作るわけもない。まだまだ僕は知らな過ぎるので、まずは2年かけ200羽集めてみようと思立て、フィンランドに渡った最初の出張で出会った



2003-2004

形が独特な3度目のシエツポ。バード本に掲載されているのは実はこれ。レッド×ライトブルー、ライトブルー×グリーン、グレイ×ブルー、ブラック×ラスターの4色木箱入でセット販売されました。後にフィンランドでは個別販売もされた模様。2度目のシエツポに近くて大きく。頭とクチバシは割に小さく上に反り、代りにお尻がほってり大きい。形もサイズも揃っていても綺麗なお仕上げ。

SIGNED / O.Toikka Nuutajarvi

バードコレクターから、ゴツリとコレクションを譲り受け一気にその目標に達してしまった。そこから僕の加速装置付バードライフは始まり、多くのバードが僕の元に集い、それらを飾り、眺め、配置換えを続けた末、サイズ別に整理整頓し規則正しく並べるコレクション型陳列法より、ザックリ自然に形成された群れの如く飾る自然群型陳列法が洒落していると、飾り方にも自分なりの方向性ができた。スコープアパートメントの写真で繰り返しお見せしたから、きっとアレか、と気付く方も多いだろう。すると、レアという感覚は完全抜かして、飾るという視点のみを持ってしても欲しいバードNO.1がシエツポとなる。僕の場合は少し早送りでご処に至ったわけだけれども、アニュアルバードや毎年リリースされる新しいバード、つまりは現行バードを中心に群を形成していても、きっと同じ所に達する。バードは大きく目サイズが多く、そこがメインである。それらを複数飾り、綺麗に見せるにはバランス的に違うサイズが必要だ。そこで、まずは脚付と脚無を混ぜる一手。それは人気もあり比較的入手しやすいKIWIとIBISという大きな2群がある上に、ビンテージにも洒落たバードが豊富に存在するので難なくクリアできるだろう。そしてもう一手、小さなバードを集める。これが猛烈に難儀である。何故なら過去に膨大なバードが作られているが、小さなバードは極めて種類少ない。更に個人的な好みを含ませると、透明感がどうして欲しい。すると大きくは5種類程度しかなく、加えてどれも形状が似ていて面白みに欠ける。どれも普通ののだ。だが、その難関をブッチギリの満足度を持ってクリアしてしまうバードがシエツポである。更に元祖バードなのだから、こんなに満たされる作品はない。バードコレクションにとって、なくては困る存在とはシエツポなのだ。これがなければいくらバードを並べてもセンター不在みたいな事となるのである。更に加えるならスコープが別注したエッグも

圧倒的に違う



1995

メールオーダー (カタログ通販) 用に1995年に制作された2度目のシエツポ。生産期間は1996年までの1年間で、底面のサインは、O.Toikka Nuutajarvi 1995と手彫りされている。サインについては脚付の物で年号無しサンドブラストを見た事がある。カラーはコバルトブルーのボディにグリーンのクチバシ。この色の組み合わせでしか作っていなかったと思われる。初期型シエツポより大ぶりで、3度目のシエツポへと段階を踏んで形が変化したことが分かる。

SIGNED / O.Toikka Nuutajarvi 1995

同じ物という魅力

その日に使える色ガラスを組み合わせ新しい物を作る。制限の中で作るのもいいもんだぞって、オイバはいつも言うのだけれど、今みたいに同じ物を延々と作り続けるのとは違い、その日に使える色に制限はあっても、作りたい物を毎日作りたいように作れるのだから、そんな自由な事はないんじゃないだろうか。そもそも、そんな作り方、ありそうでない。オイバからしか聞いた事なく、そうして出来た物は、オイバが1975年に作ったブテリというボトルかシエツポぐらいしか、僕の周りには見当たらない。(キークリもそれに近いが一点物のような作品は別にしておく。) 管理する側からするとSKU的な?商品コード的な?色番号どうすんの的な?あらゆる事が気になるだろうに、それを全く無視して自由に作らせてしまう当時の管理職は凄いなと、管理職偉いなと、管理職新しい価値作るなど、只ヒタスラに感心してしまう。手作りのお品でございますから、表情にそれぞれ違いはございます。そちら、味として個性としてお楽しみください。なんて次元じゃあーない、圧倒的に異なる同じ物が日々作りだされるのだから、その物が集合した様子というのは、見ていて実に新鮮で、大きな魅力と特別な価値をズンと感じてしまう。制限のある中、自由に作られた量産品の集合というのは、一点物とは違う特殊な良い香りがする。そんな作り方をした物が他にないから、その物の集合を見る機会もなく、見た事のない様子は、見た目には新鮮なのは当然か。多くの色がハラハラと入り乱れ、光を透過させた姿は何とも美しい。沢山の色が集まれば集まる程に、その綺麗さは増していく。正直、二桁あっても一向に困らない唯一のバードであり、それは圧倒的に違う同じ物、シエツポだけに与えられた特権である。他のバードと作り方やバリエーションの形成が大きく異なるので、そんな魅力が生まれるのだ。それで今回、膨大な数をオーダーする必要があったので、バリエーションも併せて膨大に増やし配色を15としてみた。流石にその日使えるガラスを使って自由に作る、という所までは

再現できていないけれど、当時迫るバリエーションになっているのだから、生産背景のストーリーは別にして、アウトプットとしては発売当時に近く、発注数の問題をうまく方法で解決したのではないかと思っている。そして過去の復刻ばかりではなく、新しい配色も生み出すことができた

気宇壮大な1対3理論でプロジェクト遂行セヨ。

僕の中で大きなバード1羽に対しシエツポ3羽で互角の存在感、そんな感覚がある。だからシエツポは1羽飾るというより群れで飾りましょう。って、ストレートに書いてしまうと、まとめて売りたいから、そんな事を!って、大量型押し売りみたいに捉えられそうだから、それ実は逆なんだよねって件について解説です。アイデアはこう。存在感が1:3なら、価格も1:3だ。流石にこれはイッタラからも無茶苦茶だ、ヨーロッパでの想定売価ですら200ユーロだと言われたけれども、思いついてしまったから貫き通さねばならぬ。裏面研磨が効いて高くするのはわかるのだけれども、交渉を重ねた末に影れ上がったのが発注個数で、結果15,000個という事です。一般的なバードが1羽6万円ぐらいとして、その3分の1でシエツポは2万円、3羽で6万円。これなら多くの人が複数個買えるのではないだろうか?結局は仕入れる会社がリスクを思いっきりとれば価格は変えられる。加えて良い物を作ろうという気持ちがあれば尚良し。ただ、リスクを負わないから、みんなが高い買い物をしなくてはいけない。それを今回大きく解決しているので見逃せませんよと、そういう事だ。今のこの世にシエツポ15,000個オーダーしようなんてバカはどこにもいないだろうから、こんな気宇壮大な企画はどこにも成り立つ事はなく、それこそ地球を投げるが如くの、スコープ史上最大の力技と言える。ちなみに無駄に同じ物を多く作ると物の価値は下がるので1色1,000個としてみた。ナンバリングもされて



1972-1978

オイバトイッカのバードの始まり。後に続くバードの原型となったのが、この初期型シエツポ。丸みがありコンパクト、くちばしが下向きに大きくついているものが多い。最近ではフィンランドでも見かけなくなり価格は上がるばかり。底面にNotsjoの刻印があるのは初期シエツポだけ。ボディとクチバシのカラーコンビネーションで50種類あると言っている人が、色の濃淡を抜けば18種類ぐらいと思う。

SIGNED / O.Toikka Nuutajarvi Notsjo

いる。様々な経験からバランスを読みスコープの別注は数量を組んでいるので、他の別注や限定バードとは価値の形成も異なる結果となるはずだ。ロット500個で4色作り1つ35,000円とかは

未来の事と、総括と。

スコーププレゼンツな4度目のシエツポで、ある程度の群れを作る事ができれば、あとはスコープが頑張らずとも、ヘルシンキへ旅行した時や、フラックと立ち寄ったビンテージショップ、オークションなど、運と出会いに身を任せ、少しづつ数を増やしているのだから楽しみは続くよどこまでも、だ。シエツポは沢山あるのがベストだけれども、1個5万も6万もするような年代物を何個も揃える事なんてできる訳もなく、そもそも、そんな膨大に見つかる物でもなく、それがまた違う色でなければいけないなんてハードルが高すぎる訳だから、このスコープが別注した4度目のシエツポが、母体作りのプースト的役割を担うだろう。スコープのシエツポは元祖シエツポの形やサイズや仕上げを引きついでいるから、一緒に混ぜて飾っても違和感がないという利点もあり、それが理想的だろうといった次第だ。といいながら、やはりファーストシエツポはいいよね、なんて思うわけだけれど、冷静にファーストシエツポを見てみると、実にバラバラで、できの良し悪しもあり、おかしな物も大量に含まれ果てしなく自由。それぐらいが、群れの形成には良いように思うのでシエツポについてはザックリ集めてみようか、あばたもエクボ。スコープのリスクはマックス高まりましたが、買う側からすれば企業側のリスクもヘッタクレもなく、15配色もあって、価格もお手頃なのだから、よりどりみどりでイ事だらけ。新品ビンテージ織り交ぜてのシエツポ相場3万〜6万というラインから大きく外れた超スベクタクル! 少々やり過ぎかもしれませんが、これ以上ないラインまでやっているの、絶好のチャンスと言えるでしょう。これでバードの良さが広まり、オイバファンが増え、皆さんのバードの群れが充実する事を祈って。バードを買うならスコープで、どうぞ末永くご晶屑に。

Oiva Toikka iittala scope

4度目のシエツポ スコープにて